集落の話の聴き手だより

第**14**号



今月は... 天神町



- ・水を楽しみ、水に苦労した暮らし
- ・当時の楽しみは、夏は水遊び、冬はスケート
- ・天神森には、江戸の名残

語り手

輿水 洋一さん 青木 哲子さん

関水 正博さん 出浦 正任さん

八千穂駅と千曲川に挟まれた集落、天神町。旧八千穂 小中学校や、黒澤酒造など、町民にもお馴染みの場所が あり、のどかな田園や歴史ある民家も残っています。北 側を「境田」地区、南側を「樋口」地区と呼んでいます。 今回は樋口地区にお住まいの皆さんに、地域のことをお 伺いしました。

当時の宮前橋と天神橋 それぞれの景色

千曲川には、現在集落の北側にある宮前橋、南側にある 天神橋の場所にそれぞれ吊り橋がかかっていました。

現在の宮前橋の近くには、しらかば社会体育館があります。周辺には新しい道もできていますが、昔の景色は違っていたようです。橋も木造で、川の中央の中洲を中継地点として両岸を繋いでいました。

「(宮前橋のところにあった吊り橋を)壊したのは、

(八千穂) 中学を作る時。」と正博さんが当時を振り返ります。昔は宮前橋の周辺は葦が広がる湿地だった、とも教えてくださいました。

旧八千穂小中学校のあたりには、田んぼや鯉の養殖池があったといいます。天神町と対岸の宮前地区までは、今は住宅が立ち並んでいますが、当時は広い河原だったそうです。

対して、天神橋の方はどんな様子だったのでしょうか。 こちらは多くの人が行き交う場所だったようです。

「だってここは、材木を運ぶトロッコ線路って言われて たじゃねえか。昔は佐久穂積(現八千穂)の駅は材木が たっぷりあっただ。」と洋一さん。

洋一さんたちはトロッコ道(線路)について、少し上の世代の人からよく聞かされていたといいます。トロッコ道がなくなってからも八千穂高原方面から吊り橋を経由して駅には材木が運ばれました。

「子どもの頃、材木を汽車に乗せる起重機(クレーン)があったのを覚えています。」と正任さんも懐かしみます。 現在は、橋のあたりには天神森や大きな石碑が目立ちますが、この場所も昔は様子が違っていたそうです。





聴き取り当日の皆さん。懐かしい話題に会話が弾みます。

「写真の中にでる木 でしょう。これである木 で下あるたっこのででる木 をあることであるに石 で下あるに石 でででる木 生 がしょとったののが はったいた。 は でします。



昔の天神橋の様子。 吊り橋だった様子が分かります。

昔は天神森のそばに公民館があり、道を挟んで反対側の欅の木のふもとには川の砂地がありました。そこには土俵もあり、子どもたちでよく遊んだそうです。しかし残念ながら、土俵は昭和40年の台風災害で流されてしまいました。

さまざまな被害をもたらす千曲川ですが、普段は、子ども たちの遊び場でもありました。みなさんがよく遊んだのは、 千曲川と大石川の合流するあたり。女の子は水浴び、男の子は魚とりして遊ぶのが楽しかったようです。

天神町を流れる二つの用水路

千曲川で魚を獲った話題から洋一さんが、「そこに一間(1.82m)くらいの今は埋まってる細い水路があっただ。そこにはハヤ(ウグイ)がいっぱいいた。(ふやけて)手の指紋がなくなるっくれいやった(捕まえた)もんだ。」と笑います。

魚は用水路の隅にいる習性があり、子どもでも簡単に捕まえることができました。家に持って帰ると、お母さんが煮つけにしたり囲炉裏で焼いたりして、晩御飯のおかずになったそうです。

用水について、「家のそば(の用水路)で、お米研いだり、顔洗ったり。 お風呂の(お湯を貯めるのに)14杯入れないといけなかったの。」と哲子 さんも話します。哲子さんが使っていたのは、海瀬用水でした。海瀬村の田 んぼに入れるための用水で、中央区に取水口があり、千曲川から水を引き入 れています。水量も多く、黒澤酒造の前を通って海瀬へ流れています。

対して、天神町の南側、旧樋口村の田んぼの用水は、樋口用水と呼ばれます。

「東馬流の市野沢川ってところが元なんだけど、雨が降らない限りほとんど(水が)来ない。筆岩の川や小さな沢が合流してくるんだ。」と正博さん。今でも、天神町の集落の東側を樋口用水、西側を海瀬用水が流れているそうです。



現在の海瀬用水。 当時は蛍も飛んでいたそうです。

東京電力の水力発電と簡易水道

用水のお話から、飲み水についてのお話も伺いました。水力発電を進めていた東京電力と深く関わっているようです。

「発電所ができてから、みんな井戸が枯れちゃったのよね。だから、飲み水があまりなかったの。」と哲子さん。東電が井戸を2つ掘ってくれた以外にも、『高岩樋口簡易水道』を村の人が協力して作りました

「(樋口踏切の手前の所で)ようちゃん(洋一さん)が掘ってたの今でも覚えてるよ。」と正博さんが話すと、洋一さんも「掘ったよ。ほっちょい、ほっちょいって。いいところと、悪いところがあって。悪いところなんて、えらい(大変)だ。」と答えます。

地質によって掘りやすい所と掘りにくい所があり、冬は地面が凍っていて大変だったそうです。 簡易水道で使っていた高岩のタンクは今では佐久 水道に移管され活用されています。

「東電の社宅が4棟あってね。今の町営(住宅)もそうだった。そして、発電所にはお風呂(銭湯)もあって、関係者は入れたんだよ。」という哲子さんの話に、正博さんも「町営住宅から、線路渡った空き地みたいのがあって玉突き場(ビリヤード場)があってね。」と付け足します。

特に天神町から坂を登ってすぐの貯水池は、印象に残っているようです。「昔は貯水池も定期的に水をはらっていたよ。」と洋一さん。水を抜いて掃除をするタイミングで、魚を獲りにいったと懐かしみます。このように、集落の周辺には、東電関係の施設が沢山あったようです。

今でも続く3つの神様を巡るお祭り

水に関わりの深い天神町の樋口地区では、毎年4月に3つの神様をお参りするお祭りがあります。それぞれどんな神様なのでしょうか。

1つ目の「富士浅間さん」は、天神町と中央区の間のカーブになっている山の中に鎮座する、お産や子どもの成長を願う神様です。

「(富士浅間さんまでは)かなり登っていかないといけない。 小さな祠だから、道がないんだよ。」と哲子さん。富士浅間さん 以外にも祠や石碑がいくつかあるそうです。

2つ目は、千曲川河川の愛宕公園近くに鎮座する「水神様」。田んぼの水や、千曲川の氾濫に苦労していた昔の人の願いがしのばれます。

3つ目は、天神森の「天神さん」。一番大きく、今でも区の皆さんできれいに整備されています。

お祭りではこの3つの神様のお参りを終えた後、近くの公民館で茶話会をするのだそうです。産神様が含まれているので、「女の人のお祭り」だとも話してくれました。今では子どもが少なくなってきていますが、この行事は旧樋口地区で続いています。

水と共に苦労しながらも、強く柔らかな天神町の人々の暮らし が垣間見える聴き取りでした。天神町のみなさん、貴重なお話を 聴かせていただきありがとうございました。



天神森には、 今でも沢山の千羽鶴が飾られていました。

聴き手 川嶋 愛香 山崎 藍子

文章川嶋愛香編集櫻井麻美デザイン西澤ユキ

下海瀬と人の暮らし



上原克善さんは、下海瀬で生まれた。「団塊の世代だか ら、同級生は16人いたの。5人亡くなって、集落に残っ ているのは2人だけになっちゃった。|

「小学校高学年の時、忘れもしないのは『浅間山の噴火』。 小学校5年か6年の8月の午後、天気は晴れだった。遊び 場だった諏訪神社でチャンバラごっこをしていた時、『お い、浅間が爆発したぞ。』って誰かが言ったので見ると、 噴煙が真っ直ぐ、ものすごい高さまで上がってた。みんな で口をぽかんとさせて見ていた。びっくりしたけど、怖く はなかったです。|

「あと、下海瀬の子どもたちは、1ヶ月に1回位だった か、朝、県道の掃除をしてました。終わると、鬼ごっこや 隠れん坊をして遊んでた。その当時は子どもが多かったの で、学校から帰ると、公民館の庭や刈り終わった田んぼで、 の農業の師匠です。菊づくりを始めて7, 8年目のことで ゴムボール・鍬の柄のバットで野球に夢中だった。」

いろいろ采配するんです。どんど焼きの時だって、中学生 たちが山に入って木を切り出してくるんです。大人は手出 ししなかった。子どもたちだけでやぐらを組むので、そん な大きなものは作れなかったです。2月にあった天神祭は 面白かった。公民館でやったんですが、母親たちが五目御 飯を作ってくれて、食べた後公民館の中を暗くして肝試し をやりました。遊ぶことしかしてなかった。」と克善さ んは当時のことを懐かしそうに話してくれた。

克善さんの父親が教員だった影響で、高校の国語教員に なった。初任地は上伊那農業高校定時制、県内の高校をい くつか回り、佐久穂町に戻ってきたのが38歳の時でした。 高校を卒業し、大学、教員生活を続けていたので、戻って 来た時は、浦島太郎のような状態で、知っている人も少な くなっていたそうだ。定年退職後、以前から関心のあった 中国の大学に日本語教員として2年間赴任する。言語学が 専門だったので、漢字の祖国である中国に行ってみたかっ たと言う。観光で行ったことは何回もあるが、実際住んで みなければ分からないことがあると考えて決心したと語っ てくれた。

阿部一太郎さんは下海瀬、下宿に生まれ、今日まで暮ら してきた。お話を聞いて、驚いたことは、記憶が鮮明であ ること。小学校担任の名前を1年生から6年生までスラス ラ言える。人の名前は覚えておかないと失礼だという。

「私は、海瀬国民学校(旧佐久中央小学校)に通ってま した。昭和19年の春入学。当時のクラスは赤組、白組に 分けられていました。下海瀬にいた同級生は女衆が多くて 12人、男が10人いました。遊びといっても、みんな農 家の子どもたちで、農繁期は手伝いばかりしていた。遊べ るようになるのは、11月からだな。よく遊んだのは、電 柱と電柱の二手に分かれて、出会ったところでじゃんけん をして、勝った方が負けた子どもを自分の電柱(陣地)に 下海瀬は海瀬新田と天神町(旧八千穂村)に挟まれた集連れてくるという遊びで楽しかった。冬になれば、そり滑 りとスケート。下駄スケートのことを『げろり』と呼んで いて、『げろりに行かざい。』とよく言ったもんです。田 んぼがスケート場で先輩たちが滑って見せてくれる。先輩 たちが年下の私らの面倒をよく見てくれました。今の時代 では考えられないくらいでしたな。|

「父親は運搬業をしていて、馬を1頭飼って山から木材 を馬に引かせて佐久穂積駅(現八千穂駅)や羽黒下駅まで 運ぶ仕事をしてました。私が中学1年生の時、親父が亡く なりました。中学を卒業する時に、担任が『お前はもっと 上級の学校に行けるけれど、家の事情で農業をやることに なる。ついては、農業に関する参考書をやるからしっかり 勉強をしなさい。』と何冊も本を買ってくれました。私は 人に恵まれてきました。菊づくりを始める時には、農業に 詳しい人から手取り足取り一から教えてもらいました。私 す。ひょう害にあって菊が全滅したんです。露地栽培では 「子どもの世界にも縦社会があって、中学生が頭になって 天候に左右されてしまう。そこで思い切って、ハウスで カーネーション栽培に転向しました。気がついたら50年 たってました。今は、息子が後を継いでくれてます。将来 は孫が後を継いでくれると言ってくれてます。人間は働く ときに働かなきゃだめだ。この地で何とか頑張って子ども に残せるものができた。それも周りにいる人たちのおかげ です。 | と一太郎さんは語る。





一太郎さんの父親、利男さん 帽子がかっこいい

山口英男さんは、赤屋(赤谷と書く人もいる)集落の 生まれ。

「私の子どもの頃は畑八開発のプラントがあるところ は、河原と畑でした。そこには千曲川の支流が流れてい て、そこで水遊びを友達としてました。千曲川で遊んだ こともありますが、そんな時は対岸で遊んでいる畑八の 子どもたちと石の投げ合いをしたことを覚えています。 その中の一人がとても元気な息子(子どものこと)で今 でも覚えています。千曲川の支流にはうなぎがいて、夕 方に糸の先の針にミミズをつけて沈めておき、朝取りに 行くとウナギがかかってるんです。母親に頼んで、焼い てもらい、友達と分けて食べた記憶があります。昔は田 んぼに農薬を使ってなかったので、どじょうが一杯いま した。竹で編んだしかけ籠を3つ、夕方に仕掛けておい て、朝見に行くと多い時には20匹ほど取れました。近 所にどじょう好きの人がいたので、その人に売って、こ づかい稼ぎをしました。こづかい稼ぎといえば、8月の お盆前に山に花を採りに行きました。桔梗、女郎花、百 合の花を採ってリヤカーに乗せ、清水町の市が立つとき に売りに行ったことを覚えてます。| と子どもの頃の記 憶をたどるように話してくれた。

英男さんは、経理一筋で生きてきた。17歳で地元の 運送会社に就職。65歳で退職した後、別の会社に就職、 20年経つ。現在も現役で働いている。英男さんに仕事 に取り組む姿勢を尋ねると、「その日の仕事はその日に 終わらせる。明日でいいやというわけにはいかない。次 の日に何が起きるか分からない。そう考えて仕事をして きました。それが長続きする秘訣です。|





中嶋近美さんは南牧村、高原野菜農家に生まれた。子ども の頃から畑仕事をしたけれど、嫌だと思ったことはないとい う。夏休みは毎日畑仕事を手伝い、昼休みになると野イチゴ を探して食べるのが楽しかったと、話してくれました。「夏 休みで思い出すのが、父親が先生に夏休みの宿題は出さない でくれ、家の手伝いができなくなるからと直談判して先生を 驚かせたことがありました。家の手伝いをするのが当たり前 の時代でしたね。当時、野菜の収穫箱は木箱で、それを両親 が毎晩遅くまでトントン音をさせて作っていたのを覚えてい ます。私も手伝ったことがありますが難しかったです。収獲 した野菜の切り口に水で溶いた石灰をつける手伝いもしまし た。今思うと本当に家の手伝いをしました。でもちっとも嫌

近美さんは下海瀬にお嫁に来て、50年になるそうです。 「家は担当制です。私はりんごとプルーンを作る担当。お父 さん(近美さんの夫)はお米作り担当で、ライスセンターを経 営してます。同じことを一緒にすると、意見が合わないこと があるし、夫に使われているような気持ちになるので、担当 制にしました。果樹栽培はやったことがなかったので、農協 の講習会に出て勉強しました。美味しいリンゴやプルーンを 作れるよう自分なりに研究したりしていると自然に研究心が 生まれてきます。

でなかったです。|

農協婦人部に入っていた時、影響を受けた女性がいます。 彼女から土づくりに欠かせないボカシ肥料の作り方、冬場の ハウスで小松菜やホウレン草を作れることも教わりました。 とてもバイタリティーがある女性で、玉ねぎや落花生がこの 地域でも作れることを助言してくれました。そんなものが作 れると思っていなかったのですが、やってみるとちゃんと収 穫できたのです。今では、誰でも玉ねぎや落花生を作ってま す。影響力のある女性でした。|と話してくれた。リンゴ畑 1反歩、プルーン畑1反5畝を一人で切り盛りするのは大変 ではないですかと聞くと、「畑によって味が違うの。だから 土壌検査をして土づくりをします。自分なりに工夫して美味 しいりんごやプルーンができると嬉しいし、楽しい。一人で やっているので、好きな時に好きなことをする時間が作れる の。今、佐久市にあるハーモニカ・オカリナ教室に通ってい ます。農繁期でも関係なくね。自分でする農業は自由がきい ていいです。|



プルーン畑に立つ近美さん









